

若者と地域の つながりを あきらめない！



NPO インターンシップラボシンポジウム 2020

報告書

**オンライン
開催**
(Zoom)

日時：9月19日（土）13:00～15:30

20日（日）13:00～17:00

主催：NPO インターンシップラボシンポジウム実行委員会

助成：公益財団法人トヨタ財団

はじめに

私たち NPO インターンシップラボは、各地域で NPO インターンシッププログラムを運営する中間支援組織のコーディネーターが集まり、2018 年からスタートしました。シンポジウムや勉強会などの情報発信・交流の機会の他、事例調査等の活動を通じて、NPO インターンシップの意義や価値について議論しています。

本シンポジウムはその一環として、4 月から実行委員会をオンライン上で開催し、準備を進めてきました。

集まった全国のコーディネーターの皆さんとともに議論したい内容を考え、新型コロナウイルス感染症が拡大する中でも、「若者と地域をつなぐ NPO インターンシップの推進をあきらめたくない！」という実行委員の心の声そのまま、「若者と地域とのつながりをあきらめない！」をテーマとしました。

今年の実行委員会では、東京、神奈川、千葉、埼玉から新たに 6 名のメンバーが加わり、若者が地域で活躍する類似事例も取りあげた内容について各セミナーで議論されました。一度も直接会うことなく本番を迎えることに少し不安も覚えましたが、それぞれのコミュニケーション力の高さに助けられ、オンライン化の壁を乗り越え、無事シンポジウムを開催することができました。

NPO インターンシップラボは、自分なりのやり方で主体的に地域に関わろうとする「まちの小さな主人公」を増やすことを目的としています。シンポジウム当日は、コロナ禍でもあきらめずに前を向き、どのように活動が続いているのか、全国の NPO インターンシップやその類似プログラムを行う、まちなかのコーディネーターの皆さんに登壇いただき、実際の取り組みの姿とそれぞれが大切にしたい思いを紹介いただきました。また、オンラインならではの試みとしてブレイクアウトルームの機能も活用し、少人数に分かれての意見交換の時間もあり、参加者同士のコミュニケーションが盛り上がる場も多くありました。

本報告書はそのシンポジウムの記録をまとめたものです。NPO インターンシップを始め、若者と地域をつなぐ取り組みに関わる皆様の活動の参考となれば幸いです。

NPO インターンシップラボ シンポジウム 2020 開催日程

9/19
1日目

13:00-14:00

オープニングトークセッション 「まちの小さな主人公をつなぎいかすコツ」

14:00-15:30

セミナー1 「学生が変わる!? 地域が変わる!? ～ NPO インターンシップ徹底解剖 2020 ～」

9/20
2日目

13:00-14:30

セミナー2 <選択制>

2-1 「地域で学生を受け入れるためのしかけとは～つい参加したくなるコーディネーションを探る～」

2-2 「しくじりから見えた成功体験」

15:00-16:30

セミナー3 「コロナ禍での学生と地域のつながりを考える」

16:30-17:00

クロージングセッション



NPO インターンシップ とは？

主に大学生・専門学生・高校生が NPO で一定期間インターンシップ（就業体験）をするプログラムです。運営主体や実施期間などは様々あります。本事業ではその中でも企業インターンシップのような就業目的ではなく、学生が地域や NPO を学び、社会参加するきっかけ作りとして行われているプログラムを対象としています。

まちの小さな主人公ってどんな人？

NPO インターンシップラボ「全国 NPO インターンシップラボ事例集」より



生まれている効果

- ・NPOが活性化し、発展する
- ・地域と若者がつながる
- ・若者の経験値が高まる
- ・主体的に動ける人が地域に増える
- ・地域が活性化し、多様なつながりが活動に活きている
- ・社会の課題解決が促進される

NPO インターンシップでまちなかに **小さな主人公**が増える！

小さな主人公とは？

リーダーを育てる仕組みはいろいろありますが、リーダーはひとりだと孤立してしまいます。普段はあまり表に出ないけれど、NPOに参加することでそういうリーダーを支えて地域を盛り上げていける若者の存在が必要になります。「まだやりたいことがわからない」「自分に自信がない」という普通の若者が地域に出ることで、そのような、いわゆる「フォロワー層」になるのではないかと考えています。

1) リーダーを支えるフォロワー的存在である 小さな主人公も大事

「リーダー的な主人公」

NPO・社会的企業等の立場で
新たな道を切り拓く



この層の担い手を
育てることだけでなく、

「小さな主人公」

普段はあまり表には
出ないけれど、NPOや
地域の活動に関心・共感を寄せる



こっちの層も
大事!!

2) そうした小さな主人公はNPOインターンシップの ような体験型プログラムで育まれる

やりたいことが
まだわからない…

自分のできるところから
もうちょっと何かやってみたい!



体験

NPOインターン
シッププログラム



自分に自信がない…

まずは企業に就職するけど、
できる範囲でまちに関わり続けたい!

※本来、すべての人はその方の人生における主人公ですし、主人公に大きいも小さいもないところですが、今回はあえて新たな動きで社会を切り拓かれ、時に表舞台に立つこともあるリーダー的な主人公との対比で「小さな主人公」という表現を用いています。

今回のシンポジウムでは、
NPO インターンシップはもちろん
いろいろな仕組みで若者が地域で活躍している
事例をもとに、81人の参加者と一緒に
”若者と地域とのつながりをあきらめない”
方法を探りました。



オープニングトークセッション 「まちの小さな主人公をつなぎいかすコツ」

インターンシップを通じて人をつなぎ、
いかしてきた方々にまちの小さな主人公を
見つけ育てるコツを伺います。
実践例を聞いてコーディネート
の魅力や重要性を学びましょう。



青木さん

石原さん



NPO 法人
ふくしま NPO
ネットワークセンター

野地 理恵子氏

進行



NPO 法人
岡山 NPO センター
代表理事

石原 達也氏

ゲスト



千葉工業大学
(南房総市産学協働
地域活力創造推進
プロジェクト
地域コーディネーター)

青木 秀幸氏

ゲスト

岡山県岡山市「ESD インターンシップ」の事例

石原さんからは「今後、持続可能な社会づくりを担って
いく人を育てよう」というテーマで、岡山市と共に 2015
年から実施している NPO インターンシップ・「ESD 推進に
よる持続可能な社会づくり担い手育成事業」の事例を紹介
いただきました。延べで 83 名の参加学生と 84 の受け入
れ団体が関わっています。

「これから先、色々な社会問題・変えていったほうがよ
いことにきちんと気づけるようになってほしい」と石原さ

んは語ります。インターンシップの中では独自に設計した
ワークシートも活用していますが、そこには参加者が市民
活動に対して深く考えるために仕組みが二つありました。
一つは参加者の地域・社会構造等への理解を深めること。
そしてもう一つは NPO 団体がどういう意図で事業を行っ
ているのか仮説を立て、そのアプローチや活動が果たして
正しいのか、深く考え・判断する機会を作ること。こうし
た自己学習の樹が気を組み込むことで、活動時間は短くとも
実を伴った活動になるように意識しています。また、参
加者だけでなく受け入れ団体側にも、「しっかり社会に参
画していきたい、と考えられる人の育成のための事業」と
理解をしてもらっていることが

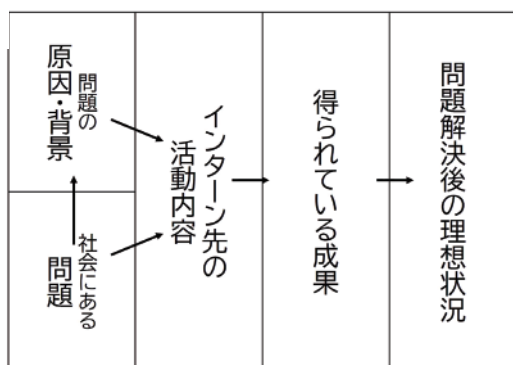
NPO インターンシップの
下支えとなっています。



千葉県南房総市「千葉工業大学」の事例

青木さんは地域の活力を取り戻すために、千葉工業大学
の学生が南房総市の地域で行う NPO インターンシップ・「産
学協働地域活力創造プロジェクト」に携わっています。青

課題設定ワークショップ 3 (まとめ)



ESD インターンシップで行っている「課題設定ワークショップ」の仕様

木さんが意識していることは「多様な入り口と学生の成長や関心に応じた継続的な活躍の場を提供すること」「学生を大学から地域へ押し出す仕組みと地域側から学生を引っ張り出す仕組み」の2点。それをもとに、参加者のモチベーションやスキルの段階に応じたプログラムが展開されています。例えば、大学1～2年生と対象としたものであれば、地域の人々と交流しながら、地域団体のミッションをしつかり理解することを重視したものとし、彼らが南房総市にとっての関係人口となることを裏のねらいとしています。そこから「もっと力を使いたい」と意欲になった学生には、「若者チャレンジ支援」の枠組みを用意し、地元の小・中学生の理科系教育支援に取り組めるようにしています。



産学協働地域活力創造プロジェクトの様子

「大学と地域を『つなぐコツ』として重要となるのは『拠点』…よりどころとなる人・場所だと思っています。そういった場が地域にないと思うように学生も動きづらいついています」と青木さん。地域の空き家等を借り、学生がそこに泊まれるようにしたり、小学生向けの教室の場にしたりする取り組みも行ったところ、効果的に働いたとのこと。例えば、滞在できる居場所ができることで学生が地域にいる時間が長くなり、結果的にまちの人からの学生への認知度が向上したほか、よい影響が様々出てきました。また、学生が「まちの小さな主人公」・あるいは地域のつなぎ手として存在することで、住民間の交流の機会・地域への愛着度・地域活動への住民参加意欲が上昇しつつある様子が見えてきたそうです。変化を明確に数値で測ることはまだ難しい段階とのことですが、学生が地域へ入ること地元の祭礼等も実施できるようになった例もあり、「地域の人々の交流をつないでいることは間違いないと思います」と青木さんは笑顔で語ります。

「小さな主人公」が増えると地域はどう変わるのか

青木さんからは「先述した取り組みを通して学生が地域に馴染んでいることで、台風災害の復旧支援活動の際に地域住民側から大学へ悩んでいることや困っていることをありのままに相談してくれるようになった」という例の紹介がありました。日頃から関係性がある程度構築されていたことで、住民が本当に困っていることを大学側に頼ってくれたことが活動の際にとってもありがたかった、とのこと。

石原さんからは、学生にとっての地域活動のメリットについての考察がありました。「(NPO インターンシップを通して) 地域の活動をすることで社会のしくみやルールが早くわかる、ということは利点なんじゃないかと思っています。活動を通して『社会に出てからは何が社会に役立つのか・何を大事にするべきか』といったことを掴める。そこで色々な問題を知り、実際に悩みに直面している人を知る。そういうことを知れることで社会にやさしくなれると思っています」。NPO インターンシップを経ることで「社会にやさしい人」が世の中に増え、地域にも変化をもたらす重要な人材となるのではないかと、との指摘があり、セッションは終了しました。



●分科会を振り返って●

石原さん：新型コロナウイルスだから、というだけではなく、今後は地域のことやテクノロジーの進化による仕事づくりの変化に関心を持つ人材育成が重要になっていくのでは。今はNPO団体とのプログラムが多いですが、今後は学校教育の現場とNPOインターンシップをどう一緒に行っていくか、という点も大事なのではないのでしょうか。

青木さん：今年度は大学の授業はすべてオンライン化し、課外活動もなかなかできなくなっていました。が、今後もオンラインでどこまでできるか…という点はポイントだと思います。千葉工大の専門性である理系分野の特徴も活かし、何ができるかを模索していきたいです。

学生が変わる!? 地域が変わる!? NPO インターンシップ徹底解剖 2020

セミナー 1

とちぎコミュニティ基金の「たかはら子ども未来基金」は、子どもや若者の未来を応援する目的で、県内在住の夫妻が設立した基金を活用してインターンを実施しています。学生、地域はどのような変化が生まれているのか、徹底解剖します。



聖学院大学
コミュニティ
サービスラーニング
講師

川田 虎男氏

進行



とちぎコミュニティ
基金 職員

大木本 舞氏

ゲスト



NPO 法人
オオタカ保護基金
サシバの里自然学校 校長

遠藤 隼氏

ゲスト



NPO インターンシップ
プログラム経験者・
社会人

會田 未来氏

ゲスト



NPO インターンシップ
プログラム経験者・
大学生

稲川 タ梨氏

ゲスト



NPO インターンシップ参加者への助成を行う基金

栃木県内の NPO や支援団体・ボランティアが協働で運営している、市民の基金 & プロジェクト実行チームである「とちぎコミュニティ基金」。その中には子どもや若者の未来を応援する目的で、県内在住の夫妻が設立した「たかはら子ども未来基金」というプロジェクトがあります。団体のスタートアップ助成も行うこの基金では、NPO 団体へインターンシップへ行く学生に対する助成活動も行っています。この分科会では、実際にたかはら子ども未来基金に参加した学生と、受け入れ団体の両者の視点から「NPO インターンシップで本当に地域や学生が変わるのか？」という点についてトークセッションを行いました。

学生の参加の理由も人それぞれ

助成制度を活用して NPO インターンシップに参加した會田さん。地域の異世代交流の場をつくる「えんがお」で6ヶ月活動しました。「今までも学生サポーター（※団体のボランティア）として参加していた団体でしたが、インターン生として参加することで、より一層深いところを知れま

した。主体性や創造性を試される場になっていたかなと思います」と話します。助成制度を活用して参加することで「お金をもらっている」という責任感や、「自分の行動が社会に還元できているか」を意識しながら活動するようになり、何をするにしても+αのことを考えて行動するようになったことが大きな変化だったそうです。



會田さん

同じく参加した稲川さんは、「NPO で働く」ことに興味があり、子どもの居場所「アットホームきよはら」でインターン生として活動しました。

ところが実際に活動してみると、活動先に来る子ども

たちに元気をもらうことも多い一方で悩みも多かったとい
います。子どもたちとの関係性づくりや、バイトや授業も
ある中でのスケジュール管理の難しさに苦戦させられまし
た。なかでも大きな壁となったのは「プレッシャー」でした。

「他のインターン生の取り組みを聞いたりすると、『私も
何かやらないと』という気持ちになってしまったんです。
また、『大学生と何かすることで
良い効果があるのではないかと』と
いう団体さんの期待がプレッシャー
になることもありました」



稲川さん

NPO インターンシップを経た変化

そう語る稲川さんですが、苦戦したことからも良い変
化が生まれていたといいます。「他のインターン生との交
流が焦りにもなりましたが、いい刺激にもなっていたんで
すよね。『自分だったらどうすべきか』と考えるように
なったり、周りの大人に相談してみたりするようになりました。
主体的に考えて行動できるようになった」

今は大学を卒業し、小学校で教員の仕事に就いている會
田さんも、活動の中でもらったアドバイスが今の仕事の中
で生きているといいます。二人とも口を揃えて話していた
のは「大学での学びはインプット、インターンでの活動が
アウトプット（実践の機会）」になっているということ。
授業で学ぶ社会課題が実際に自分の近くでも起こってい
るんだ、と実感が湧く場面が多く、実践で得たものをどう学
びに変えるのかという「実践と学びの循環」を行えるよう
になったことが大きかった、と学生の視点からの NPO イ
ンターンシップの価値についても触れてくれました。

受け入れ団体の考える「NPO インターンシップとは」

学生の受け入れを行う遠藤さんは、団体で行っている自

然学校のプログラムへ3年間、学生インターンの受け入れ
に携わってきました。その中で特に重要だと感じたのは「学
生がやりたいこと・できることと、団体がやってほしいと
考えることのギャップをはじめにどれだけ減らせるか、一
緒に話しながら探っていくこと」。一口に「NPO インター
ンシップ参加者」と言っても、目的や特性は人それぞれ違
います。例えば「ボランティアを体験したい」と思って来
る場合と、「ここに就職したい」と思って参加しに来る場
合でのモチベーションの違い。また、所属している学部によ
っても関心やできることが違ってきます。教育学部の学生
なら子どもへの対応に優れていたり、農学部の学生は
黙々と作業することに長けていたり…。それらを十分に活
かし、お互いにとってより良い体験とするためにも、「根
気強くコミュニケーションをとり続けることが重要」だと
遠藤さんは考えており、活動日以外でも学生と会話をする
機会を作っています。ここまで丁寧に受け入れることで、
団体には負荷が大きい部分もあると感じることも正直多い
そうですが、受け入れたインターン生が社会人になってか
らでもボランティアに来ることもあるといいます。

最後には「NPO インターンシップはこれからの地域をつ
くる人を生み出すための投資。団体・参加者の両者にとっ
て良い機会になっていると思います」と話し、学生と団体
の両者にとっての NPO インターンシップの価値を示して
いただきました。



学生と団体をつなぐコーディネーターの工夫

とちぎコミュニティ基金の職員としてインターンシップ
参加者と受け入れ団体のコーディネートをしている大木本
さん。つなぎ手としての工夫やコツを聞きました！

大木本さん：NPO インターンシップとは「地域
の担い手を作っていくための種まきのプログラム」だと思
っています。特に地域も学生も中間支援者も主体的に
動く、というのが大事なかなと思います。受け入れ団体
の中には、学生の年代の人たちとあまり接する機会がなく、
コミュニケーションに不安がある、という相談もありま
すが、例えば、複数名で受け入れを担当してみることで、
馬が合う人が見つかることも多いです。

大変なことも少なくはありませんが、
地域・団体の両方に良い影響をもた
らしてくれる NPO インターンシップ
の参加者を「受け入れてみよう」と
思ってもらえたら嬉しいです！



つい参加したくなるコーディネーションを探る

一つの団体だけでは学生の受け入れは難しい…
そんなことを考えたことはありませんか。

この分科会では、地域×大学をベースにした学生の受け入れ事例を通じて、つい参加したくなる地域でのコーディネーションのヒントを考えてみたいと思います。



↑へりぽと特製「コミュニケーションカード」を使って参加者とのやりとりも行いました！



法政大学4年生、
へりぽと代表

橋本 空氏

進行



一般社団法人
おやまちプロジェクト
代表理事

高野 雄太氏

ゲスト



千葉商科大学
地域連携推進センター
センター長

朽木 量氏

ゲスト



まち×学生
プロジェクト

原島 隆行氏
森 勤氏
小倉 勝十氏

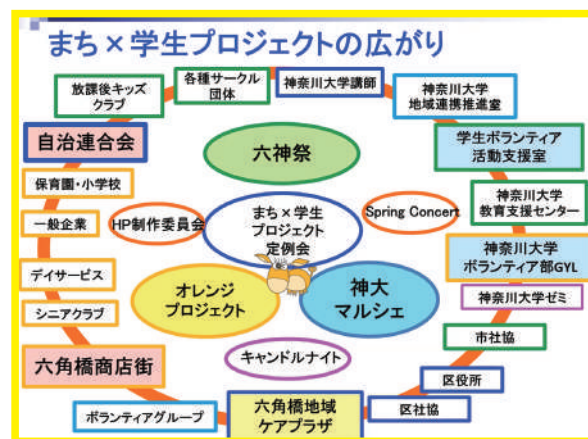
ゲスト

取り組みの「個性」はココ！

一般社団法人おやまちプロジェクトの高野さん。世田谷区尾山台で活動していますが、なんと「地域の課題解決を目的としない」ことが団体のポリシーです。「まちでの暮らしをもっともっと豊かにする」ということを最大のミッションとしています。

千葉商科大学地域連携推進センターの朽木先生。これまでの「大学の『知』を地域社会に一方的に発信することが主体だった」地域連携の形ではなく、大学の方から地域に歩み寄り、連携へのハードルを下げるべく取り組みをしています。特徴的な取り組みとしてNPO向けの「地域志向活動助成金」制度を設置しました。

横浜市六角橋で行われているまち×学生プロジェクトから登壇したのは地元町会の森会長と、学生の小倉さん。神奈川大学、商店街、杉山神社の3つの資源を活かしたまちづくりが特徴的です。プロジェクトの立ち上げ時に「良いまち」のイメージを話し合い、そのなかで挙がった「学生が4年間通ったのちに、『子どもを育てるなら六角橋がいいよね』と思ってもらえるまち」という方針を大切に、学生と大人の上下がないまちづくりの活動をしています。



3人チームで登壇した「まち×学生プロジェクト」のしくみ図



この分科会に森会長と小倉さんが一緒に参加している時点で、学生と地域がどれだけつながっているかが伝わってきますね！

継続のためのしかけとは？

「大学のゼミのプロジェクトとして実施していることが大きいです。そのゼミに入ると必ずおやまちプロジェクトに参加するので、学生が途切れることがないんですね。」と話す高野さん。初めの活動は、「学生がただ通行するだけの通りにはしたくない。学生と地元住民、というような

境界線をなくすようにしていこう」という流れで、商店街の歩行者天国とゼミでのコラボの取り組みをしました。

千葉商科大学の「地域志向活動助成金」でも、同じように大学の教員や学生と団体を繋げている朽木先生。教員の研究テーマと合った活動とマッチングできれば、その先も教員としても活用したいと感ずることが多いため、学生の卒業に左右されず息の長い活動になるそうです。



まずはゼミの先生とつながると大きいですね。先生がいなくなる限り続くので。

学生が定着するには「人」が大事？

大学生と一緒に活動するにあたり、まずは、「学生より学校を知っている状態になろう」と考えた原島さん。毎日学食に通うことで、授業がなかったり、学生が余裕のある時間帯の把握に努めたそうです。

同じく学生の小倉さんからは学生の定着に重要な2点の「人」の話がありました。一つは「活動している人が魅力的かどうか」。まちの課題解決ということ以上に森会長が魅力的だったことが小倉さんの継続のポイントでした。

二つ目は、コーディネーターの存在。学生は卒業した後のことまで気が回らず、長期的な継続を見越すのであれば間の調整をするためにもコーディネーターが居たほうがよいのではないか、という指摘がありました。



学生から見た一緒に活動しやすい人って、大学がいつ忙しか、いつ休みかとかが分かっている人だと思います。あと魅力的な人！



学生の視点から活動の魅力を語った小倉さん

活動でまちに生まれた変化

「一番大きな変化は、都市大生がいきなり人工芝をひいて何かすることを誰も不思議に思わなくなったこと」と話すのは高野さん。学生がまちの中で過ごすことが当たり前になり、いるだけで大人や地域をつなぐ存在に学生がなっているといいます。

朽木先生からは大学の視点で「地域で活動していなかった先生や学生が活動するようになった」ことが大きな変化だといいます。「こんないい活動しているんだから学生来てよ」とだけ団体側から言われ、なかなか学生が参加しないことも以前は少なくなかったそうですが、地域志向活動助成金の審査や団体との面談を通して、学生や教員にとっての活動のメリットをきちんと考えてもらう機会となり、継続したマッチング事例につながっているとのこと。



朽木先生

大学のユニークな助成制度で学生と地域をつなぐ事例も

●分科会を振り返って●

高野さん：活動している場所も枠組みも違うけど、言っていることはみんな同じだと感じました（笑）。

朽木先生：大事なことは共通しているんですね。まずはやってみることに、コーディネーターが大事ということ。そしてこうした情報交換によってもっと良い取り組みが生まれていくんだと思います。高野さんの路上ゼミ、面白そうですね。

小倉さん：学生の目線でお話しさせていただきました。きっと僕にとっての森さんのような、地域の魅力的な大人ってたくさんいるんじゃないかな、と思いました。他の地域とも何かしてみたいですね。

森会長：まだまだできることはたくさんある。「こういう理由でできない」とは言わないことを大切にしています。まち×学生プロジェクトのテーマでもある「新しいことに常にチャレンジしていこう！」をこれからも続けていきたい。

原島さん：：地域・大学・外部の組織の中、コーディネーションはいろいろな形がある。今できること、今しかできないことを取り組んでいきたいと思っています。



左から橋本さん、森会長、原島さん、高野さん

しくじりから見た成功体験

セミナー 2-2

若者との活動でおこった成功事例や
失敗事例を元に、コーディネートのコツを
学びます。



進行の直井さん

世界初?! しくじり10選投票!!

A. 学生の自主性を引き出せない集	B. 参加者が集まらない	C. 受入団体が学生を「労働力」として試みよう	D. 学生とのコミュニケーションがうまく取れない
E. プログラムのマンネリ化を防ぎたい	F. インターンを終了した若者とつながれない	G. 学生と連絡を取りすぎて、連絡が取れなくなった	H. 本人がやりたいことと、団体がやりたいことが合わない
I. 学生のモチベーションを保てない	J. 団体のプログラムが作れない		Let's Vote!



NPO 法人 NICE
事務局次長 / 広報部長

直井 友樹氏

進行



認定 NPO 法人
藤沢市民活動推進機構
支援業務担当

西尾 愛氏

ゲスト



札幌市市民活動
サポートセンター

遠藤 佑介氏

ゲスト

「世界初?! しくじり 10 選」と題して、学生と団体のコーディネートをする際の「あるある」しくじり話のテーマを参加者に投票してもらい、その結果を反映させながらゲストトークを繰り広げる取り組みをしたこの分科会。

2名の登壇者からはご自身のしくじり話とその後の乗り越え事例を紹介していただきました。

【遠藤さんのしくじり話】

①参加者の申し込みが少ない

→人数が集まらず、日程を延期して実施することがあった

②学生と連絡がつかない

→受け入れ団体から学生へ連絡がつかず、センターを経由することでやりとりにタイムラグが生じた

③受け入れ先がボランティアを無償の労働力として捉えている

→受け入れ団体が力仕事や単純作業ばかり振ってしまい、学生が「雑用をさせられた」と感じてしまった



【こうして乗り越えた!】

①来てほしい層に情報が届くようにした

→センター職員が学校で NPO に関する講義をすることで、学生が「NPO インターンシップをやりたい」と思ったタイミングでつながれるようにした（参加者も増加傾向に!）

②高校生の参加者層が多い=メールや電話でのコミュニケーションを改めた

→LINE でやりとりができるように SNS の運用ガイドラインをつくり、運用開始!

③活動後、団体と入念に振り返りを行った

→活動前の打ち合わせに加え、終了後も団体としっかり話をする機会を設定。センターの思いと、団体が NPO インターンシップに期待することを話し合い、今後も受け入れを行うか判断してもらった



遠藤さん

【西尾さんのしくじり話】

①長期プログラムによる学生の途中辞退！

→学業、バイト、家庭環境の変化による辞退が毎年いた

②団体の担当者が変わり、学生が戸惑うことがあった

→「必ず団体の代表者以外で学生の担当者を置く」ことをお願いしていたが、
団体活動のスケジュールや内容の変化により、担当者の入れ替えが生じることがあった

③サポートメンバー（NPO インターンシップの先輩チーム）のマネジメントが難しい

→先輩としてのアドバイスよりもプログラムのサポートになってしまった



西尾さん

【こうして乗り越えた！】

①辞退する学生が罪悪感を強く感じないようにした

→「自分で決断をした」ことの大切さを伝える！

②団体側とコーディネート側の信頼構築が大事

→団体の担当者と引継ぎなどを丁寧にやりとりする

③サポメンへ「より年が近い先輩」の価値を伝える

→サポメンの役割や立ち位置などを他の運営スタッフに伝えるようにした

地域でつながるワカモノ×NPO インターンシッププログラム



課題解決ワークショップ

分科会の後半では、登壇者も交えてグループに分かれ、話したい「課題」を一つ選び、アイデアや事例を共有するワークショップを行いました。最終的なグループの発表内容は以下の通り。

グループ1

登壇者の事例紹介をもとに話を広げました。学生のモチベーション向上については「(活動先が)居場所になっている」「団体の人と気心知れた関係になっている」等の部分が重要なのではないか、という話が上がりました。

「人が集まらない」「無関心層にどう情報を届けるか」、というところでは、「そもそもNPOってなに？」というところをから伝えることが大切なのではないでしょうか。大学の地域系サークルとつながり、学生がハブとなって大学と団体をつないでくれる…という話もありました。

グループ2

「学生とコミュニケーションがとれないという課題」を取り上げました。話していった結果、学生と受け入れ団体でのツールの不一致がコミュニケーションの障害となっていることが多いようです。団体も歩み寄ってSNSを取り入れる一方で、学生側にも団体や事務局の電話番号を登録してもらったり、一般的なマナーを共有できるとよいのではないのでしょうか。「こうしてください」とルールを前面に出すと敬遠される原因にもなるかと思うので、まずは連絡手段・方法をすり合わせられるようにしていきたいですね。

グループ3

「学生の自主性」について。特にコロナ禍で、本来ならば実地で一緒に活動したいのに、オンラインでしか活動できない学生も出てきてしまった。学生の中でもそうした分断が起きることで、熱量の差が生じてしまう…という課題が出ました。解決策として、ある程度学生やサポートメンバーと一緒に役割分担を振り分ける案が出ました。温度差が生じやすい中では、特に「サポート側も一緒に活動していく」という観点を都度伝えることが大事だと思います。

●分科会を振り返って● 進行：直井さん

実際のコーディネーションをする際には様々な場面に直面します。そうしたときに、どれだけ応え方の引き出しを持っているかがミソになってくるかと思います。

ともすればマイナスな部分も含む
「自団体のしくじり事例」をお互いに
出して共有する、という機会もなかなか
少ないと思うので、まずは共有
いただけたことに感謝をしたいと思います！



コロナ禍での学生と地域のつながりを考える

セミナー 3

リアルなイベント開催が厳しい中、

NPO インターンシップや若者との活動現場ではどのような工夫の可能性があるのか？
課題やアイデアを共有しながら、コロナと NPO インターンシップをキーワードに語ります。



横浜市六角橋地域
ケアプラザ
地域活動交流
コーディネーター

原島 隆行氏

進行



NPO 法人
アクションポート横浜
代表理事

高城 芳之氏

進行



ユニバーサル・ピア

影山 貴大氏

ゲスト



オンライン寺子屋・
公立中学校教員

中村 証氏

ゲスト



社会福祉法人興望館
事務局主任補

萱村 竜馬氏

ゲスト

コロナ禍によって大きく変わってしまった社会。そんな中で「学生と地域のつながりをあきらめない」ことで、課題だけでなく新たな可能性も見えてきました。オンライン化の推進によって、遠方の人や障がいを持っている人ともつながる機会が増えたり、今までアプローチできていなかった社会課題への取り組みも可能となったりした事例もあります。NPO インターンシップラボにとって、「若者との何をあきらめなかったのか？」はコロナ禍のなか、ずっと考えてきたテーマです。この分科会では、リアルでの活動が難しいなかでも活動自体を止めずに、30%でも 60%でも活動し続けてきた 3 名の登壇者と一緒に、コロナ禍での学生と地域のつながりを考えていきます。

諦めなかった中で分かったこと

- ・できない中からでなく新しくできることから工夫する
- ・これまでつながらなかった新たな人との出会い
- ・話のしやすさ・参加のハードルが低くなった
- ・オンラインならつながりやすいという選択肢が増えた

- ・アプローチの難しいニーズが顕在化した
- ・リアルに転じていくタイミングへの不安
- ・オンライン環境を整え、使いこなしていくこと
- ・リアルもオンラインもという選択肢に広がられるか
- ・必要な人に支援が行き届いているか

チャット等でその場で学んだ意見をまとめながら進行了

それぞれの「あきらめない」エピソード

墨田区の福祉施設「興望館」の萱村さん。学童クラブで毎年 8 月に実施している宿泊キャンプの実施が今年は難しく、興望館の体育館でのデイキャンプという形で実施しました。リスクがあるから、と対面での活動をすべて閉じてしまうと、結果として長期的に活動が停滞してしまうと考え「どう工夫すれば対面での企画ができるのか？」という視点に切り替えてこの一年は事業に取り組んできました。

障がい者福祉への理解促進のための活動をしているユニバーサル・ピアの影山さん。「あきらめないことをあきらめない」という想いから、障がい者福祉へのきっかけづくりの場として福祉団体と学生のオンライン交流会を始めました。小さくても今できることをまずはやってみるということ意識していたといいます。

普段は中学校で教師をしているオンライン寺子屋の中村さん。緊急事態宣言発出に伴い中学校が休校となったことから「子どもたちの学びの機会をあきらめたくない」と強く感じました。そこで、自身の専門性を活かして「とりあえず 30%でもいいから取り組んでみる」と、Zoom を使ったオンラインの学習支援活動を始めました。

コロナ禍での発見や気づき

萱村) デイキャンプに参加した学生から、「できないことから、新しいことを工夫して実行できたこと。例年よりも多くのことを考えた」と感想がありました。苦戦はしましたが、学生たちのあきらめない姿に刺激を受け気づきを与えてもらいました。

影山) 関心のない人にとっては特に入りづらさがある「障がい者福祉」ですが、オンラインで話を聞くだけなら参加へのハードルが低かったようです。交流会の最終日に参加してくれた福祉施設の方も、凄く想いのこもった活動紹介をしてくれまして、結果的に学生が自然と「この施設に行ってみたい」という気持ちになっていたのが良かったです。

中村) 「オンライン授業」の可能性の大きさを感じました。対面での授業と比べても遜色ないんですね。写真や資料をすぐ共有できたり。もう一つは、実はコロナ禍の前からずっとオンライン授業の仕組みを必要としている人がいたのでは、と気づきました。アンケートで「前からこういう仕組みがほしかった。ずっと一人で部屋で勉強していた」という声があったんです。

課題に感じたこと・活動のなかで苦労したこと

萱村) 社会的に弱さを抱えている人を、このコロナ禍のなかでどう支えるか…というところ。高齢者の食事会ができなくなったり、18歳になったら児童養護施設を出ていかないといけないけど、アルバイトが見つからない若者たち。社会課題がより一層顕在化してしまった、というところを感じます。

影山) 機材がない・Zoom使ったことがない、という学生へのサポートが必要でした。活動に関心はあるけど日程の都合が合わない場合は「じゃあYoutubeなら見れるかな」と、限定公開で対応しました。

中村) 学校が再開すると私たちも忙しくて、授業ができる先生がなかなか少なくなってしまうこと。今後は積極的に教員志望の大学生たちも巻き込んでいきたいと考えています。本当は誰でもアクセスしやすいように授業の仕組みも整えたいですね。まだまだ「オンラインで授業なんて」とハードルに感じている人もいると思うんです。



左から萱村さん、影山さん、中村さん

●分科会を振り返って●

中村さん : うまくいかなくてもいいから、少しずつ、小さくでも始めることが大切だと思っています。

影山さん : リアルの場で生まれる強固なつながりもありますが、弱い・ゆるやかなつながりもオンラインでは生まれると思っています。弱いというマイナスイメージがありますが、無関心だった人も巻き込んでいけるような、今までなかった部分への穴埋めのような役割も担えるようになったのではと思っています。

萱村さん : 一人ひとりとどうつながっていけるか、という部分ですよね。弱いつながりと、やってみる勇氣。実はこの間、理事会をオンラインで初めて行いました。この分科会に誘われたことで、自団体でもオンライン化を試してみようと思ひまして。理事の皆さんからも好評でした。今後もっと「やってみる」をしてみたいと思います。

クロージング & 参加者の声

クロージング

各分科会の簡単なまとめを全体で共有したのち、ブレイクアウトルームを用いて、参加しての感想を参加者同士で共有しました。半強制的に少人数に振り分けられることで、思いがけない出会いやアイデアが生まれる時間となりました。

今まで、自分の所属分野の人との関わり
しかなかったため、とても新鮮だった

大学生にどうアプローチすればいいのか、
色々アドバイスをもらえた！

「オンラインを活用せざるを得ない状況＝地域の
団体呼んで学生とじっくり語り合ってもら
うチャンス」という話で意気投合した。



名刺交換もオンライン上で実施しました！



参加者の声 (アンケートより)

これまで感じていたことが、体系的に報告されることで
共感を感じることができました。

インターン生を今後起用するにあたり、
何かヒントになればと思い、初めて参加しました。
皆さんの話を聞いて、私の勤める施設が地域のハブと
してもっと充実できれば、と思いました。

コロナ禍の中、全国に地域と若者のつながりを途切れさせず
に続けている人たちがこんなにいることに勇気づけられました。

いずれも意欲的で希望に満ちた
実践報告で、元気をもらいました。
地域側・大学側それぞれのキーパーソンを見出し、
つなげることでできる力量をもったコーディネーターが
必要と改めて思いました。

なんといっても学生の橋本さんが
進行したことが良かった。
堂々と自然体で提案・お願いし、参加
者が協力してチャット活用で盛り上げた
ところが、「若者がハブになる」という
ことの一例だと感じた。



まとめ

今回は「若者と地域のつながりをあきらめない」というテーマでシンポジウムを行いました。オンライン開催は初めてで、実行委員会にとっても大きなチャレンジでしたが、2日間で全国から81人が集まり、長時間にわたるオンラインも盛況となりました。改めてシンポジウムを振り返り、3つのポイントをご紹介します。

①コロナ禍でもやっぱり若者と地域のつながりをあきらめない！

実行委員会で各セミナーの内容の企画が始まったのは2020年4月。新型コロナウイルスの広がりにどう向き合い、活動すればいいのか、多くの人たちが手探りの状態でした。それでも活動をつづける人たちがいることがわかり、このシンポジウムもオンラインという形でそういった事例を取り上げていきたいと、実行委員も一致団結。今回の実施となりました。当日のセミナー3でも、チャット機能を使って参加者の皆さんからたくさんの「エピソード」が共有され、「若者と地域のつながりをあきらめてはいけない」ということを再確認した2日間でした。

②まちの小さな主人公を増やすヒントももりだくさん！

オープニングセッションでは、まちなかの「小さな主人公」を地域で育てている実践者のお二人から人材育成の必要性とこれからの可能性について、理論的、時に感情的な部分からお話いただきました。セミナー2-1では、活動の目的や内容だけではなく、「活動している人が大事」と「人」に焦点が当たっていました。セミナー2-2のしくじり事例でも、コーディネーターとして学生・団体の方とどう向き合い接するか、いろいろな応え方の引き出しを増やすヒントを紹介していただきました。いろいろな視点から具体的に話せることも年1回のシンポジウムならではの魅力です。

③ますます必要となるまちなかのコーディネーター

新型コロナウイルスの影響で、社会は大きく変化しています。今まで当たり前だったイベントや地域の活動にも大きな影響が出ています。大学では授業がオンラインになり、学生の体験の機会も失われています。いまこそ、若者と地域のNPOをつなぐNPOインターンシップとコーディネーターの役割はますます重要になります。NPOインターンシップラボでも、情報交換とネットワークの場を今後も継続していきます。ぜひ一緒に活動をつくりませんか？

最後に、このシンポジウムはご支援いただいたトヨタ財団の皆様をはじめ、登壇いただいた皆様、参加くださった皆様、広報にご協力いただいた皆様、そしてNPOインターンシップラボの仲間にご協力があって開催できました。

本当にありがとうございました。



学生と地域をつなぐ、NPO インターンシップについて考える

NPO
インターンシップラボ

シンポジウム 2020



NPO インターンシップラボ実行委員会 メンバー

芦澤弘子（聖学院大学ボランティア活動支援センター）／市川徹（一般財団法人世田谷コミュニティ財団）
大石果菜（まつど市民活動サポートセンター）／大木本舞（とちぎコミュニティ基金）／生越康治（NPO 法人 NPO くまがや）
影山貴大（ソーシャルメディアーター協会）／喜田亮子（町田市地域活動サポートオフィス）／
熊谷紀良（東京ボランティア・市民活動センター）／野地理恵子（認定 NPO 法人ふくしま NPO ネットワークセンター）
原島隆行（横浜市六角橋地域ケアプラザ）／高城芳之（NPO 法人アクションポート横浜）



NPO インターンシップラボ
<http://npointernship-lab.net/>
<https://www.facebook.com/npointernlabo/>



アクションポート横浜
〒231-0023 横浜市中区山下町 94 番地 横浜中華街パーキング共同組合内
TEL&FAX: 045-662-4395 メール: info@actionport-yokohama.org
ホームページ: <http://actionport-yokohama.org/>